



## (2) 地質と地形

本市を構成する地質は、大きく①日本が海だった頃、②日本が大陸の一部だった頃、③日本列島ができる頃、④日本列島ができたのち、の四時期に分けられ、それぞれが特有の地形を作り出しています。

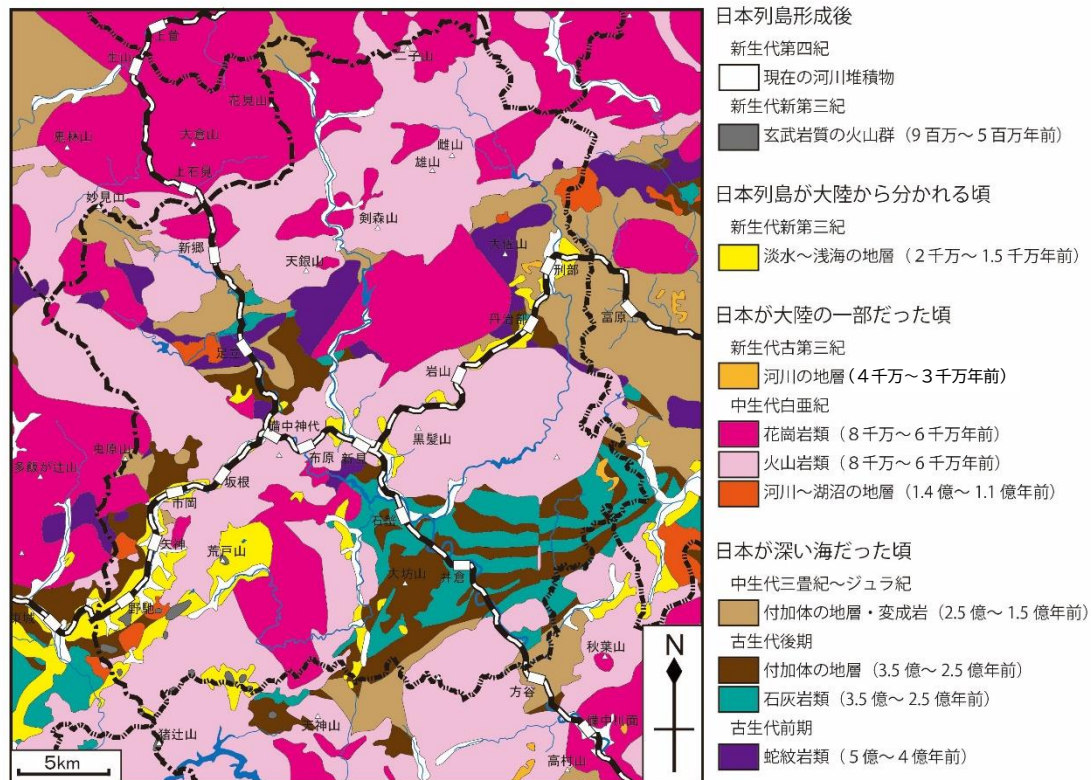


図 1-3 新見市の地質図

## ○地質

### ①日本が海だった頃の地質

中生代ジュラ紀（約1億5000万年前）以前、日本列島の大部分は大陸の東に存在する深い海溝に位置しました。海溝では海洋プレートが沈み込んでいましたが、プレート上にあった軟らかい堆積物や陸から流れてきた堆積物などは、一緒に沈むことができず、海溝の陸側斜面に集積します。そのようなものを付加体と呼び、本市には、古生代（約3億～2億5000万年前）と中生代（約2億～1億5000万年前）の付加体が分布しています。

プレートの運動で遠くから移動してきた地質体の代表的なものに、石灰岩と蛇紋岩があります。石灰岩は南東部の阿哲台にまとまって分布しています。サンゴ、ウミユリ、フズ

リナなどの化石が含まれることから、はるか遠方の温かい海で作られたサンゴ礁のかけらであると考えられています。阿哲台の石灰岩には砂岩・泥岩・チャート・玄武岩なども伴っており、集落や農地は主に石灰岩地域に分布しています。



写真 1-1 フズリナの化石を含む石灰岩

蛇紋岩は主に大佐山、足立、神郷高瀬周辺にまとま

って分布しています。これらは移動してきた海洋プレートの地下にあったマントル橄欖岩が変成し上昇してきたもので、ヒスイ輝石など地下深部で作られた鉱物を伴っています。また、かつては神郷高瀬鉱山をはじめクロムなどの蛇紋岩特有の鉱山が多数ありました。そのほか付加体で形成された堆積岩や玄武岩と、それらが変成作用を受けた結晶片岩が分布しています。



写真 1-2 大佐山

## ②日本が大陸の一部だった頃の地質

本市で最も広く分布しているのは中生代白亜紀後期（約 9000～7000 万年前）の火山活動で形成された火山岩類とそれに引き続いて貫入した花崗岩類です。火山岩類は流紋岩質・デイサイト質・安山岩質の溶岩や凝灰岩類で、特に流紋岩質～デイサイト質の大規模火砕流堆積物が前述の海の地層を覆い、巨大なカルデラを形成しました。

花崗岩類は花崗岩と花崗閃緑岩を主とし、一部に斑岩も伴います。これらは砂鉄の材料となる磁鉄鉱を多く含み、たたら製鉄や鉄穴流しが盛んに行われました。

そのほかこれより古い白亜紀前期（約 1 億 4000 万～1 億年前）の河川や湖沼で堆積した礫岩や、新生代古第三紀の 4000 万年前頃の河川に堆積した礫岩が点在します。

## ③日本列島ができる頃の地質

新生代新第三紀になると日本列島が大陸から離れ、日本海が形成されます。それにとともに低く、海が侵入していき、そこに砂礫や泥が堆積しました。市街地



の高梁川<sup>こうじろがわ</sup>沿いから、神代川<sup>おおのべがわ</sup>、大野部川<sup>ほんごうがわ</sup>、本郷川などの川沿いとその周辺に点在しています。このうち泥岩が多いところには、植物や浅い海に生息していた貝化石が多く含まれるほか、暖かい海域を示すエダサンゴや浅海性のカメの化石も見つかっています。

#### ④日本列島ができたのちの地質

日本列島ができたのち、南西部から高梁市北部にかけての地域には多数の玄武岩質の火山活動がありました。その中でも荒戸山<sup>あらとやま</sup>【市】の玄武岩には柱状節理<sup>ちゅうじょうせつり</sup>が発達するほか、地下深くのマントルを構成する橄欖岩が取り込まれています。



写真 1-3 荒戸山の柱状節理

#### ○地形

本市の南部には標高 300～500mのなだらかな吉備高原<sup>きびこうげん</sup>、北部には花見山<sup>はなみやま</sup> (1,189.1m) を最高峰とする中国山地があり、その中間に標高 170m前後の新見盆地が存在します。吉備高原は本市を最も特徴づける地形といえます。吉備高原東部の阿哲台は標高 300～400mの平坦な台地を形成し、台地上にはドリーネ（くぼ地）やカレンフェルト（林立した岩）など石灰岩特有のカルスト地形が発達しています。そのドリーネの斜面はしばしば果樹園など農地として利用され、ドリーネ内に集落が存在するなど、高度に利用されていることが阿哲台の大きな特徴です。

また、非常に多くの鍾乳洞<sup>しょうにゅうどう</sup>が存在し、それらは大きく、天井が高く幅が狭い直線型洞窟（井倉洞【県】・ごんぼうぞねの穴



写真 1-4 ドリーネ内の集落

など)、天井が低くて通路が網目状につながった

横穴迷路型洞窟（満奇洞【県】・風戸<sup>かざと</sup>の穴など）、ドリーネ底から斜めに低下していく吸い込み穴型洞窟（宇山洞【県】・秘坂鐘乳穴<sup>ひめさかなちあな</sup>\*【県】・鬼女洞<sup>きめんどう</sup>など）があります。

また、天然記念物である羅生門<sup>らしやうもん</sup>【国】は吸い込み穴型洞窟の天井が陥没することによっ

てつくられた天然橋です。台地を流れる河川は切り立った崖が続く狭いカルスト谷（無明<sup>むみょう</sup>谷など）を形成し、浸み込んだ地下水は多くの湧水となり、なかでも草間の間歇冷泉<sup>くさま かんけつれいせん</sup>【国】は天然記念物に指定されています。

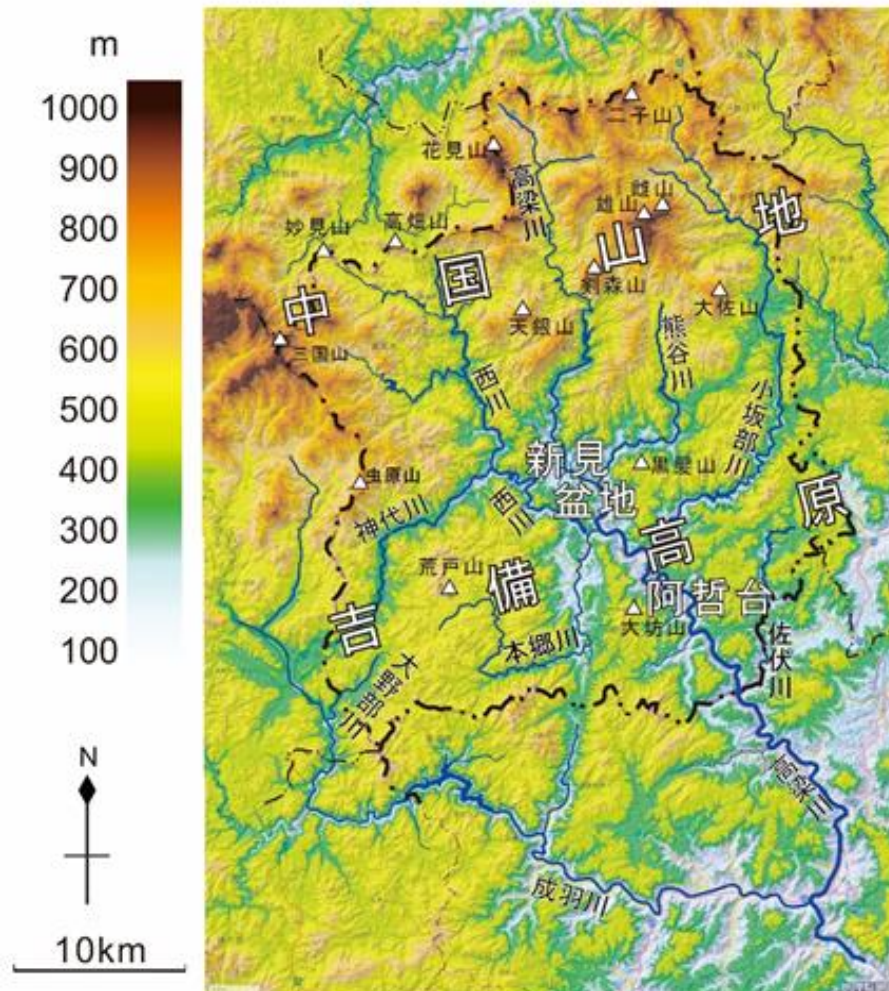


図 1-4 新見市の地形図

吉備高原西部は、鯉が窪湿原を代表とする湿原が多くなだらかな高原上に、荒戸山や明神山<sup>みょうじんやま</sup>（哲西町大野部）などの玄武岩<sup>けい</sup>頸が突出する独特の景観です。なだらかな吉備高原面には火山灰を起源とする黒ボク土が発達し、また阿哲台の石灰岩地域では残留土壌として粘土質の赤土もあり、それぞれに適した農作物が作られています。中国山地の花崗岩類が分布する地域にはたたら製鉄や鉄穴流しの跡が多く残り、千屋花見・菅生・神郷高瀬<sup>ちや はなみ すごう</sup>などは山地にもかかわらず谷の幅が広くなだらかな棚田が作られています。一方、火山岩が分布する地域では岩石が硬いため、三室峡<sup>みむろきょう</sup>、阿哲峡<sup>あてつきょう</sup>、竜頭峡<sup>りゅうずきょう</sup>、鳴滝<sup>なるたき</sup>など溪谷や滝が多く見

「夏の極上水<sup>なつひ</sup>」として親しまれています。



図1-5 新見市の主な山・河川

花見山北東麓を源流として、一級河川高梁川が南（瀬戸内海）に向かって流れています。

その流れは、特に阿哲台を横切る部分で穿入蛇行を繰り返し、井倉峽に見られるような狭く急崖からなる谷をつくっています。高梁川の支流は、東側から合流する熊谷川と小坂部



がわ  
にしがわ  
川、西側から合流する西川が主なもので、井倉峡上流部の新見盆地周辺で高梁川と合流します。

それらの支流も含めて、本市の河川はすべて高梁川水系に属します。哲西町の大野部川は成羽川に合流しますが、これも最終的に高梁川に合流します。また、市街地の高梁川や大野部川の河床には流れの強い部分に甌穴（ポットホール）が見られます。

※「日畔坂鐘乳穴」と表記される場合もありますが本文では文化財指定名称で記載しています。



写真 1-5 魚きり淵の甌穴【市】

### (3) 気候

図 1-6 は、1991～2022 年における毎月の平均気温と平均降水量を示したもので、参考のため岡山市のデータを加えています。月ごとの平均気温は新見観測所 1.1～24.5℃、千屋観測所-0.2～23.1℃で、岡山観測所の 4.6～28.1℃と比べるとかなり低くなっています。ただし、新見観測所は標高 393mの足見地区にあるので、標高 180m前後の市街地の気温はもう少し高いと考えられます。

降水量は、新見・千屋ともに年間を通じて岡山より多く、特に千屋では、降雪を反映して冬季の降水量が多くなっています。経年的な変化を見た場合、1979 年以降の年最高気温は、新見と千屋ともに徐々に高くなる傾向が見られます。積雪量は年によって大きく増減していますが、この 10 年ほどはやや少ない年が多いようです。

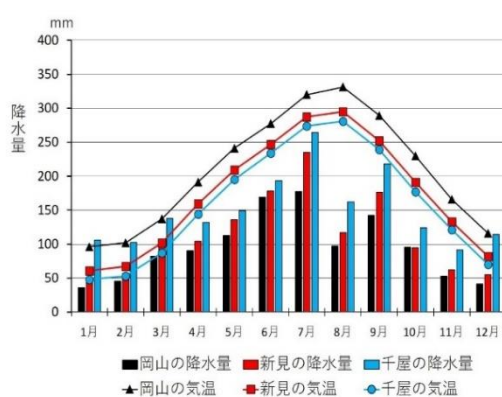


図 1-6 平均気温と平均降水量（1991～2022 年）

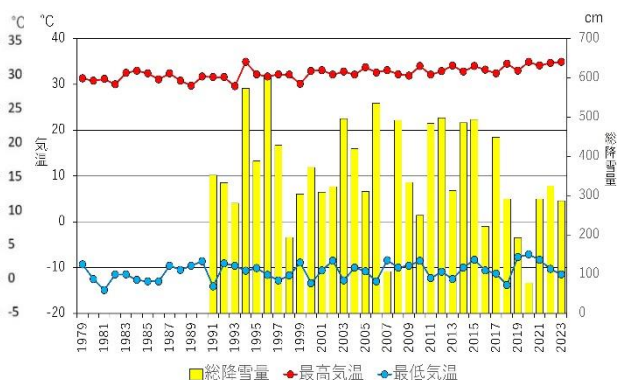


図 1-7 気温と降雪量

#### (4) 動物・植物

本市は、高梁川の源流域に広がる自然豊かな地域です。市域の86%は森林に覆われていて、北部では大半がスギ・ヒノキの人工林で、その間をぬうようにミズナラ・コナラ・クリなどの優占する夏



写真 1-6 オグラセンノウ(左)ビッチュウフウロ(右)

緑<sup>りよくこうように</sup>広葉二次林があります。南部ではアカマツ、またはコナラ・アベマキなどの夏緑<sup>じりん</sup>広葉樹の優占する二次林が広く分布し、スギ・ヒノキの人工林が混在しています。自然植生は少なく、北部の中国山地の一部にブナの自然林があるほか、社寺周辺や溪谷沿いに自然度の高い森林が残されています。また、市域にある特殊岩石地帯（特に石灰岩地と蛇紋岩地）や湿原には、草原生や岩<sup>がんがい</sup>崖生などの特殊な生物が生育、生息していることが知られ、本市の生物相を特徴づけています。

天然記念物の鯉ヶ窪湿生植物群落【国】は、南部の吉備高原の北端近く、標高 550mに位置し、古くからの農業用溜池にあります。隔離分布をすることで知られ、絶滅が心配されるオグラセンノウ、ビッチュウフウロ、ミコシギクのほか、北方系のリュウキンカ、エゾシロネなどが生育しています。ほかにもノハナショウブ、トキソウ、サギソウ、アギナシなどの湿生植物が季節を追って咲き誇ります。



写真 1-7 オオサンショウウオ【国】

天然記念物の動物には、特別天然記念物のオオサンショウウオ【国】（地域を定めず）、金<sup>きんぼたる</sup>螢発生地【県】（哲多町蚊家）、龍王池のモリアオガエル【市】（大佐小阪部）とモリアオガエル生息地【市】（哲西町上神代）があります。草間台地のウスイロヒョウモンモドキは、国内希少野生動植物種（種の保存法）に指定されています。

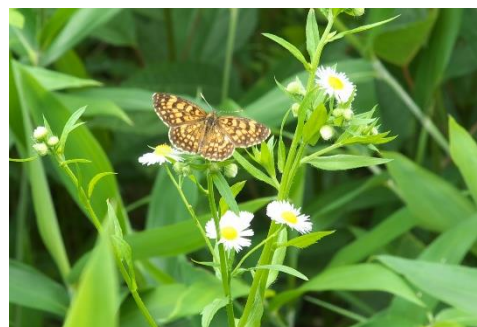


写真 1-8 ウスイロヒョウモンモドキ



表 1-1 『岡山県版レッドデータブック 2020』に掲載されている植物

絶滅危惧Ⅰ類	絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	留意
オグラセンノウ ミコシギク サクラソウ ミチノクフクジュソウ ヒメユリ	ヤチコタヌキモ トキソウ サギソウ マンシュウボダイジュ ヤマトレンギョウ ヒロハヘビノボラス	ビッチュウフウロ リュウキンカ エゾシロネ アギナシ ホンシャクナゲ チョウジガマズミ キビノクロウメモドキ ホソバナコバイモ イワツクバネウツギ ミシマサイコ	キビナワシロイチゴ

表 1-2 『岡山県版レッドデータブック 2020』に掲載されている昆虫類

絶滅危惧Ⅱ類	準絶滅危惧	情報不足	留意
オヨギカタビロアメンボ オオネクイハムシ ゴマシジミ	ヒメハルゼミ ニシキキンカメムシ セスジカメノコハムシ	コンゴウミドリヨトウ スゲヒメゾウムシ	ガロアムシ科の一種 ベニモンカラスシジミ ヤヒコカラスヨトウ

表 1-3 『岡山県版レッドデータブック 2020』に掲載されている陸産貝類

絶滅危惧Ⅰ類	イトウムシオイ、イクラドウゴマオカチグサ、マキドウゴマオカチグサ
--------	----------------------------------

## 2. 社会的状況

### (1) 行政区域の変遷



図 1-8 平成の合併前の行政区域

本市の名称は、備中国に新見郷が置かれたことに由来しているといわれています。奈良時代、国郡郷制度によって、高梁川を境に東に英賀郡※が、西に哲多郡が設置され、以後、明治時代まで続きました。江戸時代、現在の市域は新見藩、備中松山藩などと、そして幕府直轄の天領に分割されました。明治 4（1871）年、廃藩置県により新見藩は新見県に、他は倉敷県となりましたが、深津県、小田県への改称を経て、同 8（1875）年に岡山県に合併されました。同 22（1889）年には、22 の村がありましたが、時代とともに町村合併を繰り返し、昭和 30 年代に、旧新見市と千屋村が合併し、新郷村と神代村が神郷町に、丹治部村と刑部村、上刑部村が大佐町に、本郷村と新砥村、萬歳村が哲多町に、矢神村と野馳村が哲西町となりました。平成 17（2005）年、平成の大合併により、1 市 4 町が合併し、新しい新見市が誕生しました。

※元禄 10（1697）年以降に阿賀郡と置き換えられました。

表 1-4 行政区域の変遷

時 期	行 政 区 域																					
明治22(1889)～ 同29(1896)年	菅生村	上市村	新見村	高尾村	熊谷村	美穀村	石蟹郷村	草間村	豊永村	花見村	井原村	佐根村	新郷村	神代村	丹治部村	刑部村	上刑部村	本郷村	新砥村	萬歳村	矢神村	野馳村
明治29(1896)～ 同33(1900)年			新見町							千屋村												
明治33(1900)～ 昭和2(1927)年																						
昭和2(1927)～ 同21(1946)年																						
昭和21(1946)～ 同29(1954)年																						
昭和29(1954)～ 同30(1955)年	新見市																					
昭和30(1955)～ 平成17(2005)年	新見市										神郷町		大佐町		哲多町		哲西町					
平成17(2005)年～	新見市																					

## (2) 人口

本市の人口は、昭和 30（1955）年の 66,146 人から減少し続けており、令和 7（2025）年 8 月現在 25,383 人です。人口推移を年齢階層 3 区分（15 歳未満、15～64 歳、65 歳以上）別にみると、15 歳未満と 15～64 歳は減少傾向で、65 歳以上はほぼ横ばいで推移しています。高齢化率は 4 割を超えており、少子高齢化が進んでいます。

国立社会保障・人口問題研究所が公表した「日本の地域別将来推計人口（令和 5 年度推

計)」によると、本市の人口は今後も減少を続け、令和 32（2050）年には 15,000 人を下回り、総人口は令和 2（2020）年比で 2 分の 1 程度まで縮小することが見込まれています。

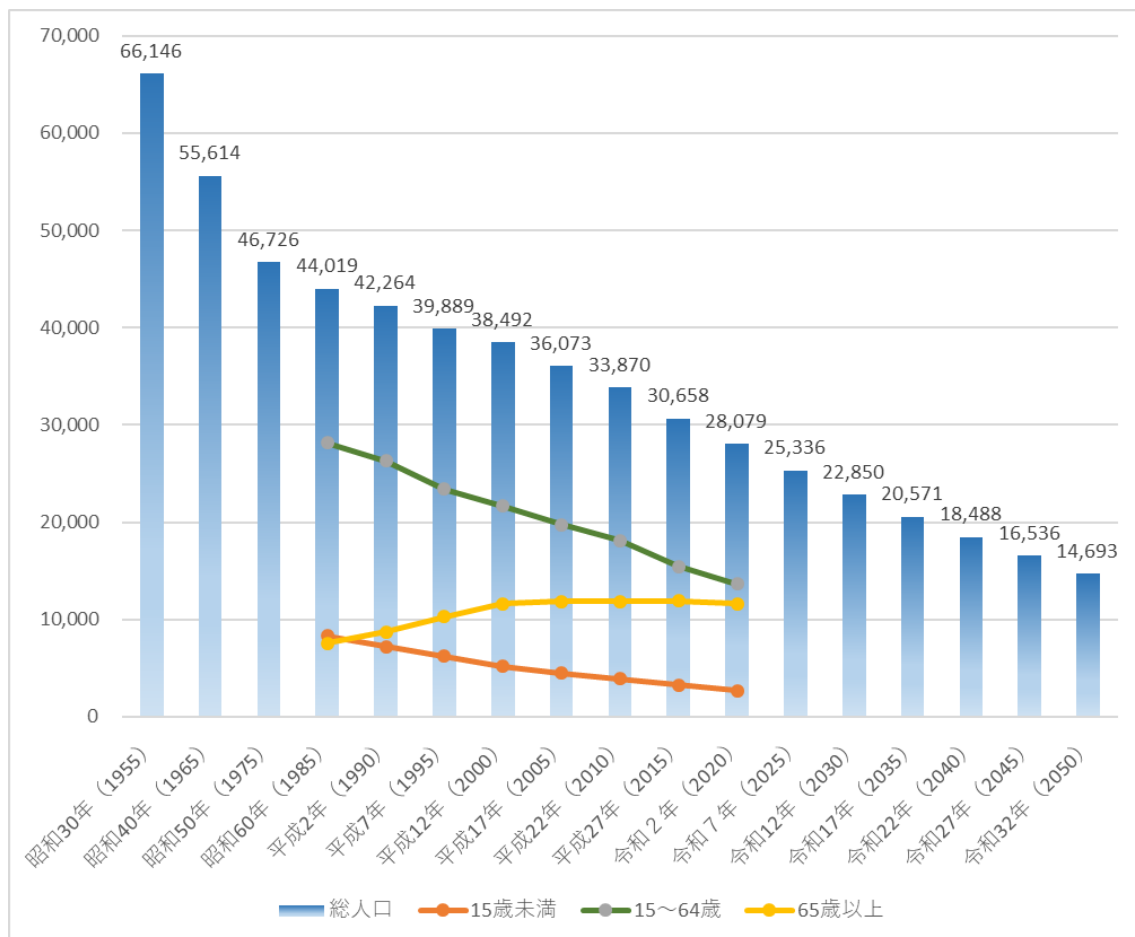


図 1-9 新見市の人口推移

（国勢調査、人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」より作成）

### (3) 土地利用

本市の令和 3（2021）年 10 月時点での民有地面積の構成比は、山林が 85.0%で最も高く、次いで田が 6.6%、畑が 3.6%、原野が 2.9%、宅地が 1.8%です。

また、本市は、新見駅がある市域のほぼ中央の位置に東西約 6.8 km、南北約 8.5 km、面積約 2,900ha

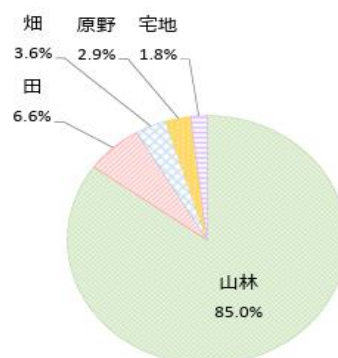


図 1-10 土地利用 資料：岡山県統計年報



の都市計画区域を指定しています。

#### (4) 産業

鉱工業は、豊富な埋蔵量を誇る石灰岩を利用した石灰産業を中心に、そのほか製造、精密機械、運輸、医薬品等の多種多様な業種が進出しています。石灰に関連する事業所が集積しており、各地で石灰の露天掘りを見ることができます。古くから石灰が使用されており、現在では化学、製鉄、肥料、食品添加物、様々な用途に加工されています。

農業は、稲作、畑作や果樹栽培が中心で、その中でもピオーネを主力としたブドウや西日本一の生産量を誇るリンドウ、黒ボク土を利用し栽培するカルスト大根、その他にモモ、トマト、ワイン用ブドウ、ソバなどのブランド力のある農作物を生産しています。

畜産は、養豚、養鶏、和牛の生産が行われ、特に黒毛和牛は最古の蔓牛※といわれる竹ノ谷蔓牛の系統を継ぐ千屋牛をブランド化しており、個人農家から企業による大規模飼養が幅広く行われています。

林業は、本市の 85% (68,394ha) を森林が占めているため盛んに行われています。民有林の 54% が人工林で、そのうちヒノキが 72%、スギが 25% を占めており、9 割近くが標準伐期齢を迎えています。このような樹種が建築部材や木育などの玩具に加工され、端材はバイオマス発電所の燃料に転化されています。

漁業は、アマゴやキャビア生産のためのチョウザメなどの養殖漁業が行われています。また河川では、アユやアマゴの川魚釣りが遊漁者によって行われています。

昭和 35(1960)年には、第一次産業（農業、林業など）が就業者全体の 6 割を占めていましたが、昭和 50(1975)年頃から、第二次産業（鉱業、建設業など）第三次産業（商業、運輸業、情報通信業、サービス業など）が占める割合が増えていきました。

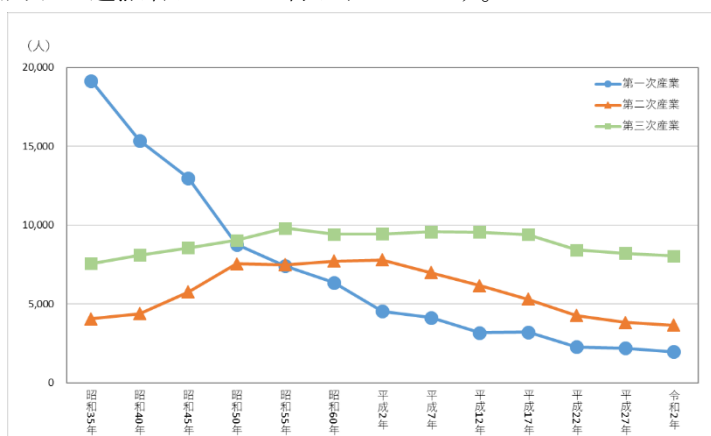


図 1-11 産業別就業者数の推移

※蔓とは優れた特徴をもつ牛の血統のことで、その系統の牛を蔓牛と呼びます。

## (5) 観光

歴史文化やにのみ遺産に関するものとして、中世に京都の東寺（教王護国寺）の荘園として栄えた新見荘関連エリア、江戸時代の新見藩の初代藩主関長治によって中心とされた御殿町周辺エリア、備中聖人の山田方谷が晩年通った小庵や終焉の地など多様な歴史文化の観光資源があります。

また、豊かな自然を活用して、カルスト台地での鍾乳洞探検や花崗岩地帯でのシャワートレッキング、湿原の散策、千屋ダムや大佐ダム湖周辺でのカヌーやサイクリング、キャンプ場、温泉、スキー場、モモ狩りやブドウ狩りなど多種多様なアクティビティが体験できます。

このほか、本市の優れた特産品である千屋牛やピオーネ、キャビア、ワインといったA級食材（グルメ）は、重要な観光コンテンツです。

本市への観光客数は、コロナ禍以前の状況に回復したものの、さらなる誘客に努める必要があり、主要なターゲットを関西圏と設定し、公式マスコットキャラクター「にーみん」を活用したイベント出展によるPR活動など、シティプロモーションに積極的に取り組んでいます。

また、モノ消費からコト消費へという観光ニーズの多様化や、団体型から個人型へという観光形態の変化に伴い、既存の食や自然、産業などの資源をさらに磨き上げ、戦略的で多様な情報発信による観光客誘致に取り組んでいます。



写真 1-9 満奇洞【県】



写真 1-10 千屋牛



写真 1-11 ピオーネ



図 1-12 公式マスコットキャラクター にーみん

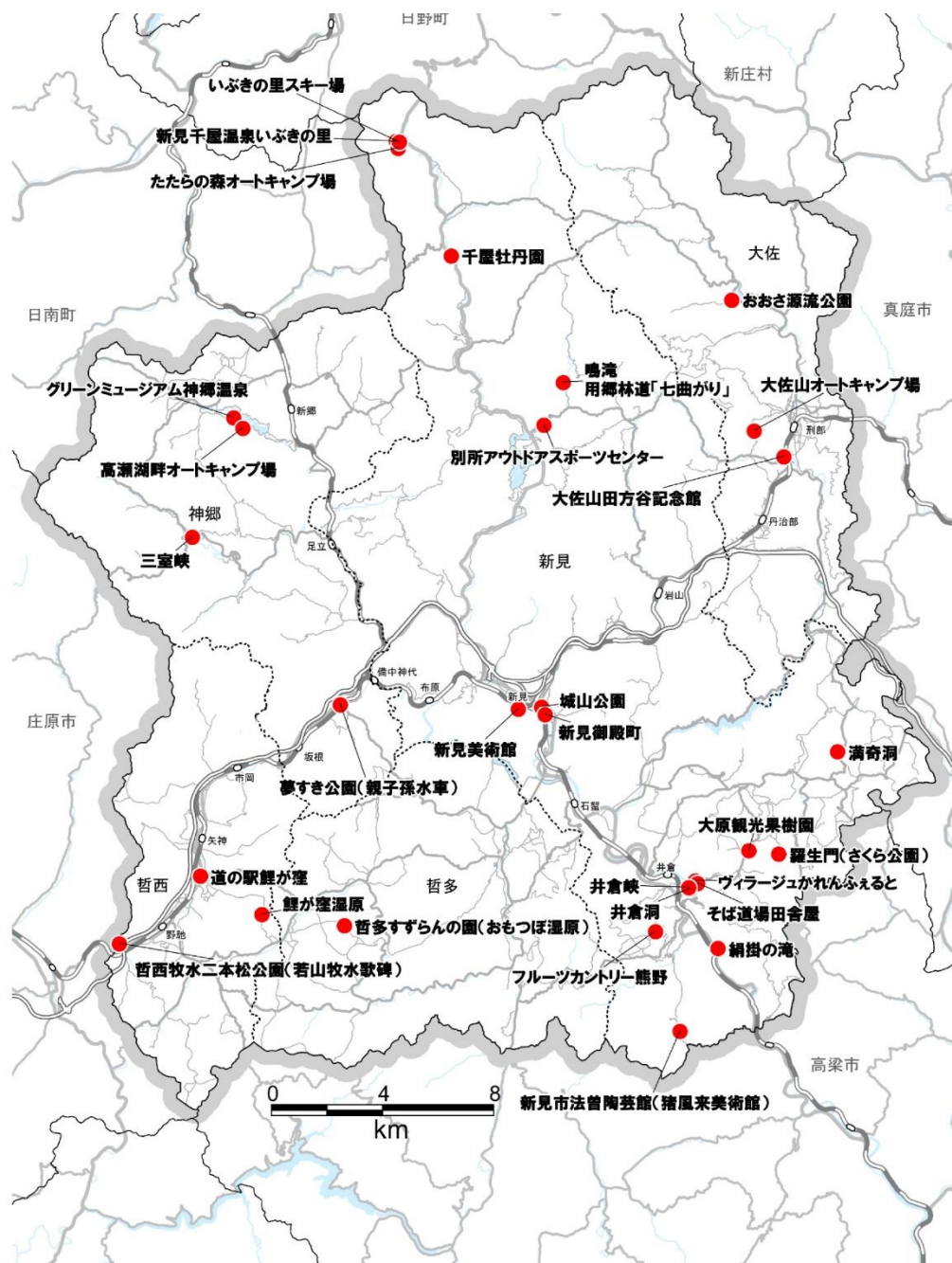


図 1-13 観光資源分布

出典：新見市地域公共交通計画



## (6) 交通

本市の基幹的な交通網として、道路は岡山市から島根県松江市に至る国道 180 号が市を南北に縦断し、本市を基点として、広島県福山市に至る国道 182 号が市の中央から西部へと横断し、そのほかの 8 本の主要地方道（県道新見勝山線・新見日南線等）などを含めて、道路網を形成しています。また、中国縦貫自動車道が市の中央部を東西に走っています。

鉄道は、JR伯備線が市を南北に縦断しており、井倉駅、石蟹駅、新見駅、布原駅※、備中神代駅、足立駅、新郷駅があります。また新見駅を起点に東へと走る JR姫新線と、西へと走る JR芸備線があり、前者の駅には岩山駅、丹治部駅、刑部駅が、後者には坂根駅、市岡駅、矢神駅、野馳駅があります。

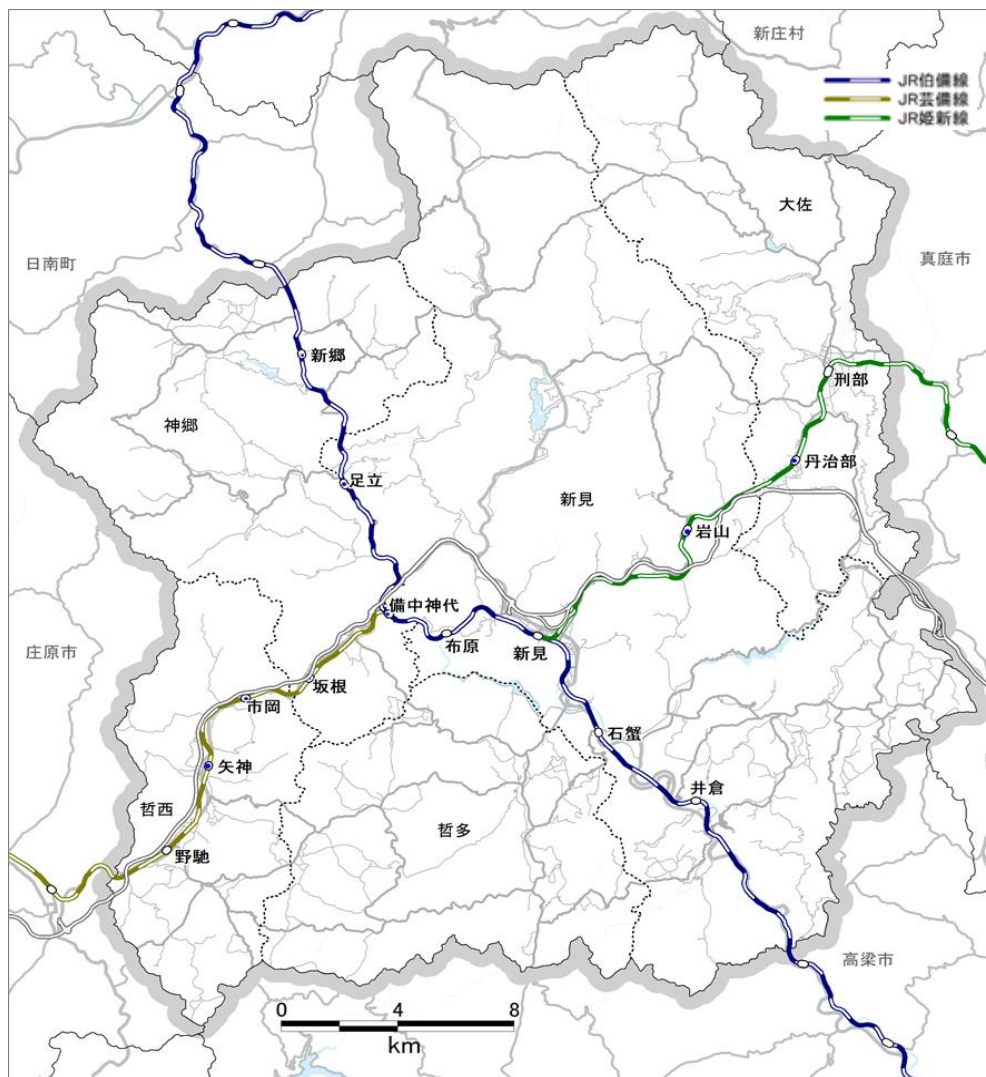


図 1-14 新見市の鉄道路線

また本市から最も近い新幹線の駅は岡山駅で、岡山駅から本市までは列車（特急）で約1時間です。岡山空港から本市までは車で約1時間10分です。

バスは、民間バスが19系統を運行しており、市営バスが10路線を、予約制の市営ふれあいバスが10路線を運行しています。

※所属路線上は伯備線、運転系統上は芸備線の扱いになります。

## (7) 文化施設等

新見美術館は、<sup>とみおかでっさい</sup>富岡鉄斎の作品をはじめとした近代日本画や<sup>ひらやまいくお</sup>平山郁夫の系統を引く現代日本画などを中心に所蔵するほか、新見荘関係物の展示をしています。また、御殿町センターでは新見藩主の関家の関連資料などを展示し、法曾陶芸館では<sup>ほうそ</sup>法曾地内で焼かれた法曾焼関連物を展示しています。大佐山田方谷記念館では山田方谷の関連物を展示し、鯉が窪湿原資料館では鯉ヶ窪湿生植物群落【国】を紹介する展示があります。

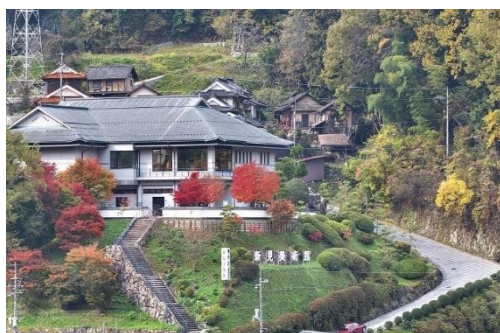


写真 1-12 新見美術館



写真 1-13 大佐山田方谷記念館

表 1-5 新見市の文化施設等一覧（令和7年8月時点）

名称	概要	住所・連絡先	備考	岡山県博物館協議会加盟
新見美術館	富岡鉄斎・横山大観・竹内栖鳳などの近代日本画から平山郁夫・田淵俊夫らの現代日本画・郷土ゆかりの画家や工芸家の作品など約1,300点を収蔵し、また新見荘関連物も展示している。	西方361 0867-72-7851	平成2（1990）年開館	○
御殿町センター	新見藩・藩主関家や船川八幡宮秋季大祭で行われる御神幸行列関連物などを展示している。	新見858 0867-72-6660	平成6（1994）年開館	
法曾陶芸館	法曾に伝わる法曾焼をはじめ、縄文造形家・猪俣来氏による現代縄文アートや復興した新たな法曾焼などを展示している。	法曾609 0867-75-2444	平成17（2005）年開館	○
大佐山田方谷記念館	備中聖人の山田方谷を紹介する施設で、方谷の外祖母を祀る小庵の方谷庵の近接地にある。大政奉還上奏文の草案（複製）や4歳時に書いた「つる」の板額などを展示している。	大佐小南323-3 0867-98-4059	平成16（2004）年開館	○
鯉が窪湿原資料館	鯉が窪湿原に生育する天然記念物鯉ヶ窪湿生植物群落【国】の説明や環境、開花時期、成り立ちなどを紹介している。	哲西町矢田4113-101 0867-94-2347	平成13（2001）年開館	

### 3. 歴史的背景

#### (1) 先史・古代

##### 【旧石器時代・縄文時代】

土器は製作せず、打製石器を使用して狩猟・採集生活をしていた旧石器時代（16000 年前以前）の遺跡が、少数ながら確認されます。野原遺跡群（神郷高瀬）は上下2層の文化層が確認され、石器群の新旧関係が明らかになりました。また、県南の石器に類似した特徴のものやサヌカイト・黒曜石といった県外から運びこまれた石材の石器が確認され、人の移動や交流を示します。その他の遺跡では、二野遺跡



写真 1-14 野原遺跡群

（哲西町矢田）でも同じくサヌカイト製の石器が、また宇山洞【県】では狩猟されたものは不明ですが、ナウマンゾウの歯が確認されています。

縄文時代（16000～3000 年前）は、現代と同様に温暖な気候で、狩猟や採集、漁労で生活を営みました。野原遺跡群では黒曜石製の矢じりや落とし穴が確認されており、それらを利用した狩猟の実態がみえます。様々な手段で獲得した各種食物を利用できた背景には、新たに土器を製作し、煮炊きができるようになったことが考えられます。青地遺跡（下熊谷）では早期・前期の土器が出土し、二野遺跡では前期・後期・晩期の土器が、西江遺跡（哲西町上神代）は晩期の土器片が多量に出土していることから、時期によってムラとキャンプ地を行き来していたことがわかります。また、本市では川を見下ろす丘陵地で縄文時代の遺跡が見つかることが多いですが、狼穴住居跡（哲西町大野部）は石灰岩の洞窟で居住の痕跡が確認されており、多様な生活スタイルを垣間見ることができます。

##### 【弥生時代】

弥生時代（3000～1650 年前）は、本格的な稲作文化が大陸から伝播して生活スタイルが一変し、より一層定住が進んでムラが形成され、水田で米作りをするようになりました。野田山遺跡【県】（哲多町成松）や岩倉遺跡（高尾）、助近遺跡（大佐永富）、



写真 1-15 野田山遺跡【県】



ふるぼう  
古坊遺跡（神郷下神代）などでは、複数の堅穴住居が確認されており、各所にムラが営まれたことがわかります。その多くは丘陵上もしくは丘陵斜面に位置します。収穫具である石包丁が出土するので、近くで水田を営んでいたことがわかります。西江遺跡では<sup>ほうけい</sup>方形



写真 1-16 西江遺跡出土  
特殊器台・壺  
岡山県古代吉備文化財センター提供

<sup>だいじょうぼ</sup>台状墓と<sup>どこうぼぐん</sup>土壙墓群が同時に築られました。墓制に階層差が反映するようになったと考えられます。<sup>よこみふんぼぐん</sup>横見墳墓群（<sup>かみいち</sup>上市）は堅穴式石室や箱式石棺、土壙墓など多様な埋葬施設が見られ、それは同一の墳墓でも混在することから、同じ墳墓に葬られる人の間にも階層差がうかがえます。また、西江遺跡の墓地では県南の特殊器台と特殊壺が、横見墳墓群では吉備系と出雲系の器台が出土しており、瀬戸内側と山陰地方の山間中間地点である本市を介して文化の交流があったことを示します。

## 【古墳時代】

3 世紀後半から 7 世紀中頃に、大きな墳丘や豊富な副葬品を持つ前方後円墳に代表される古墳が全国各地で築造されています。本市でも前方後円墳であるひさご塚古墳（哲西町上神代）が築造され、人物・円筒埴輪や須恵器、鉄刀が出土しています。また、弥生時代の横見墳墓群から継続して方形台状墓を踏襲した横見古墳群が築かれたり、11 基からなる<sup>こうぼうじ</sup>光坊寺古墳群（哲西町矢田）では大型の円墳が築かれた後も方形台状墓と似た古墳が築かれています。古墳築造における階層や地域性などがうかがえます。



写真 1-17 横見古墳群出土遺物【市】

6 世紀後半には、繰り返し埋葬ができる横穴式石室を埋葬施設に持つ小古墳が全国各地で数多く築かれるようになり、本市各地でもその状況が把握できます。しかし、類似した規模で同様の埋葬施設を持っていても、副葬品に階層差を見ることができます。例えば横見 1 号墳から出土した<sup>たち</sup>装飾大刀や装飾馬具は、他地域から権威の象徴として入手したことを示唆します。また<sup>おおきこよこあなぼぐん</sup>大迫横穴墓群【市】（神郷釜村）など横穴墓に埋葬する事例も複数確

認できますが、斜面地を削りこんだ横穴墓が比較的多く認められるのも本市の特徴で、同様に横穴墓が多い山陰地方との関りを示します。

6 世紀末の製鉄遺跡が、上神代<sup>きつねあな</sup> 狐 穴遺跡（哲西町上神代）で確認されています。ここでは原料として鉄鉱石を使用したことがわかっています。また、西江遺跡では多量の製塩土器の破片が出土しており、瀬戸内沿岸から運ばれたことが明らかになっています。

### 【飛鳥時代～平安時代】

飛鳥時代に入ると地方行政が整い、奈良時代に入ると国・郡・里・郷などが定められました。現在の県西部は備中国となり、市域は高梁川の左岸の英賀郡と、右岸の哲多郡に属しました。10 世紀前半の辞書『和名類聚抄』<sup>わみょうるいじゆしやう</sup>には両郡内の郷の名が書かれています。

郡の政治拠点である哲多郡衙は、現在のところ不明ですが、西江遺跡からは、小規模ながら掘立柱建物跡・柵・溝や円面硯が出土しているため、官衙関連施設と想定されています。また英賀郡衙は、真庭市<sup>かみみずた</sup> 上水田<sup>おどの</sup>の小殿遺跡に比定されています。

奈良時代から平安時代に仏教が広がり、市域にも仏教寺院が建立されました。三尾寺<sup>み お じ</sup>や済渡寺<sup>さいどうじ</sup>は行基が開いたと伝わり、湯川寺<sup>とうせんじ</sup>（土橋）は玄賓<sup>げんびん</sup>が隠遁した地とされ、青龍寺<sup>しょうりゅうじ</sup>（新見）は空海の開山伝承があります。本市には、古代の建造物は残っていませんが、長楽寺<sup>ちやうらくじ</sup>（哲多町矢戸）の木造阿弥陀如来座像【市】や重福寺<sup>じゅうふくじ</sup>（豊永宇山）の三如来坐像・破損仏一群が平安時代の制作と推定されています。

神社は、日咩坂鐘乳穴神社（豊永赤馬）が天平勝宝 7（750）年に勧請され、式内社備中国 18 社の一つとして記されています。また、同社は秘坂鐘乳穴【県】を霊地として祀っており、貞観元（859）年には、洞内の鍾乳石が<sup>いしのちち</sup>石鍾乳と称して薬用に採集されました。



写真 1-18 木造阿弥陀如来座像  
長楽寺所有【市】

表 1-6 『和名類聚抄』に記された郡・郷にあたる現在の地名（推定）

英賀郡	刑部郷	大佐大井野	大佐小阪部	大佐上刑部	大佐小南	大佐永富
		大佐布瀬				
	丹部郷	上熊谷	下熊谷	大佐田治部		
	林郷	唐松	草間	足見	土橋	豊永赤馬
哲多郡		豊永宇山	豊永佐伏			
	石蟹郷	井倉	石蟹	正田	長屋	法曾
	新見郷	足立	金谷	上市	高尾	
		新見	西方	馬塚		
	神代郷	神郷下神代	神郷油野	哲西町上神代		
	野馳郷	哲西町大竹	哲西町大野部	哲西町畑木	哲西町八鳥	哲西町矢田
	額部郷	坂本	菅生	千屋	千屋井原	千屋実
		千屋花見	神郷釜村	神郷高瀬		
	大飯郷	哲多町老栄	哲多町大野	哲多町荻尾	哲多町蚊家	哲多町田淵
		哲多町成松	哲多町花木	哲多町本郷	哲多町宮河内	哲多町矢戸

## (2) 中世

### 【鎌倉時代～室町時代】

平安時代後期から、現地の有力者が開発した土地を核に、荘園が設定されました。とりわけ新見<sup>おおなかとみのたかまさ</sup>荘※は歴史が詳しくわかっています。大中臣 孝正が新見郷の開発領主となり、中央官人である荘園領主の<sup>おづきたかもと</sup>小槻隆職に寄進し、さらに後白河法皇の妃の<sup>さいしょうこういん</sup>建春門院が創建した最勝光院（現京都府）に寄進されて新見荘が成立しました。領家方は経営拠点として政所を西方地内に設置しました。承久の



写真 1-19 地頭方政所跡

乱（承久 3（1221）年）の後、新見荘に鎌倉幕府が地頭を置きました。その拠点である地頭方政所跡が上市地内の田地にあり、一段低い田には堀跡も残っています。13 世紀後半、領家方と地頭方の間で下地中分が行われ、領家方は「<sup>にしがた</sup>西方」、地頭方は「<sup>ひがしがた</sup>東方」と呼ばれました。「西方」は現在も大字として残っています。

鎌倉時代末、後醍醐天皇が最勝光院の執務職（管理権）を東寺に寄進したことにより、東寺領の荘園となりました。新見地内に<sup>みつかいちば</sup>三日市庭（市場）が、上市地内に<sup>ふつかいちば</sup>二日市庭が開かれ、その二日市庭遺跡からは備前焼の壺や甕など、多くの日用品が出土しています。新見荘は年貢として、米や雑穀、銭のほか、特産物として紙・<sup>うるし</sup>漆・<sup>ろう</sup>鉄・<sup>ろ</sup>蠟を納めました。同時代の製鉄遺跡が神郷高瀬地内の貫神ソウリ遺跡や鍛冶屋床遺跡などで確認されています。このような詳細な歴史や地名などが判明しているのは、国宝「東寺百合文書」（京都府立



京都学・歴彩館所蔵)の中に多くの記録が残ったため、中には、農村女性であるたまがきが東寺に代官の形見分けを求めた通称「たまがき書状」があります。

この他に、伊勢神宮内宮領の神代野部御厨<sup>こうじろのべみくりや</sup>(神郷下神代・神郷油野・哲西町上神代・哲西町大野部に比定)があり、鉄を納めました。さらに大佐地区内に、永富保<sup>ながとみほ</sup>(大佐永富)、小阪部郷、多治部郷がありました。



写真 1-20 たまがき像

また、この時期から石造物が各地に造立され、市内外で産出する石灰岩や、和泉砂岩を使用したものがあります。

※「新見荘」の「荘」の字は、「荘」に統一して記載する。但し、団体名等や文書名・文書表題等で、「庄」を用いる場合は、そのまま記載する。

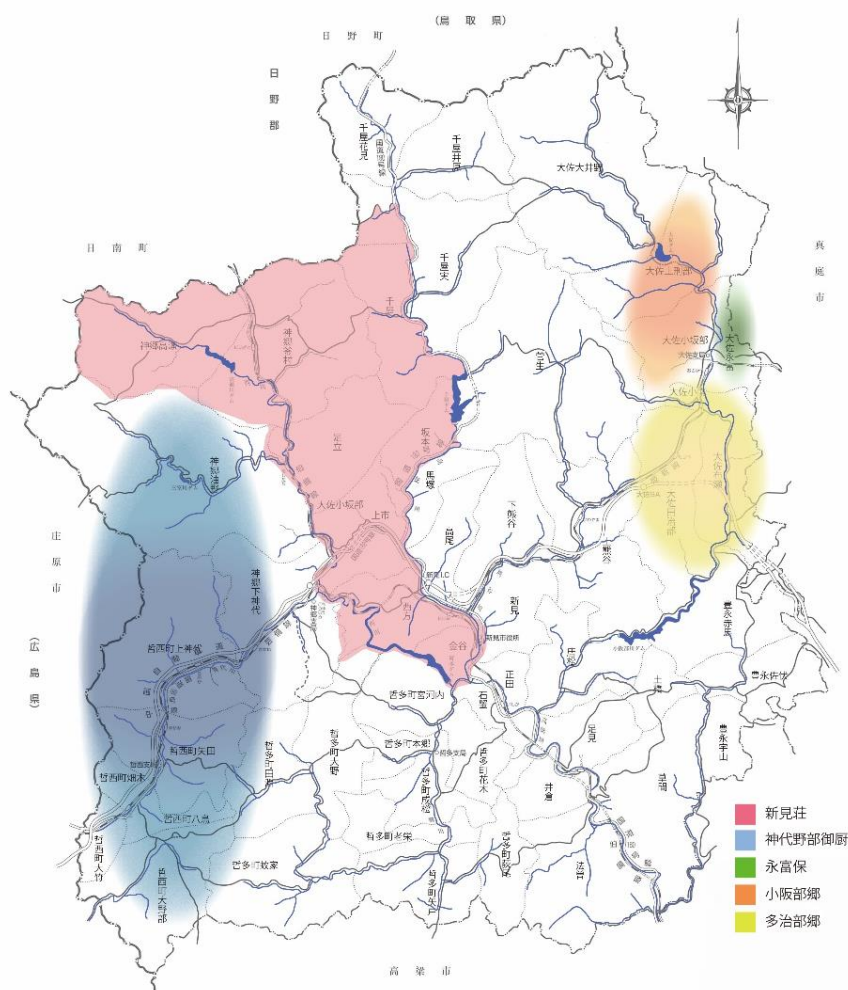


図 1-15 中世の荘園想定位置

### 【戦国時代～安土桃山時代】

応仁の乱の後、荘園は衰退しました。新見荘は上熊谷を本拠とする多治部氏の侵入を受け、  
濫妨（不当な略奪行為）にさらされました。台頭する武士同士の争いは市域でも激しく、各地に城館が築かれました。中でもゆずりは城は新見荘の代官新見氏や、備中に勢力を伸ばした三村氏の居城となりました。天正 2（1574）年、

ゆずりは城が毛利氏と宇喜多氏連合軍に攻め落とされ、三村元範は早乙女岩【市】（現在の高尾小学校内）で討ち取られます。また、この年を最後に新見荘が東寺に年貢を納めた記録は見られません。



写真 1-21 三村元範終焉の地（早乙女岩）【市】

### (3) 近世

#### 【江戸時代】

慶長 5（1600）年の関ヶ原の合戦の後、備中国は江戸幕府領となり、市域は備中国奉行小堀正次・政一父子が管轄しました。元和 3（1617）年に、英賀郡全域と哲多郡の一部が備中松山藩（池田家）、哲多郡の残りが成羽藩（山崎家）となりました。その後、池田家が断絶すると、成羽藩を継いだ水谷勝隆が備中松山藩主となりました。

勝隆は高梁川の整備を進め、備中松山から新見まで高瀬舟の航路を開きました。勝隆をはじめ後々の藩主は、各所の寺院の再建や奉納を行っています。寛文 4（1664）年、勝隆の次男の勝能は、大佐小阪部と永富を分与され、小阪部に陣屋を置き、圓通寺（大佐永富）を菩提寺としました。元禄 6（1693）年、水谷家が断絶すると、当地は安藤家、石川家、板倉家が治めました。

元禄 10（1697）年、津山藩主森家が断絶すると、森家の外戚にあたる宮川藩主関長治が新見に移され、所領 1 万 8 千石の新見藩が成立しました。御殿（陣屋）は現在の思誠小学校御殿山グラウンド周辺に築造しました。御殿（陣屋）の北

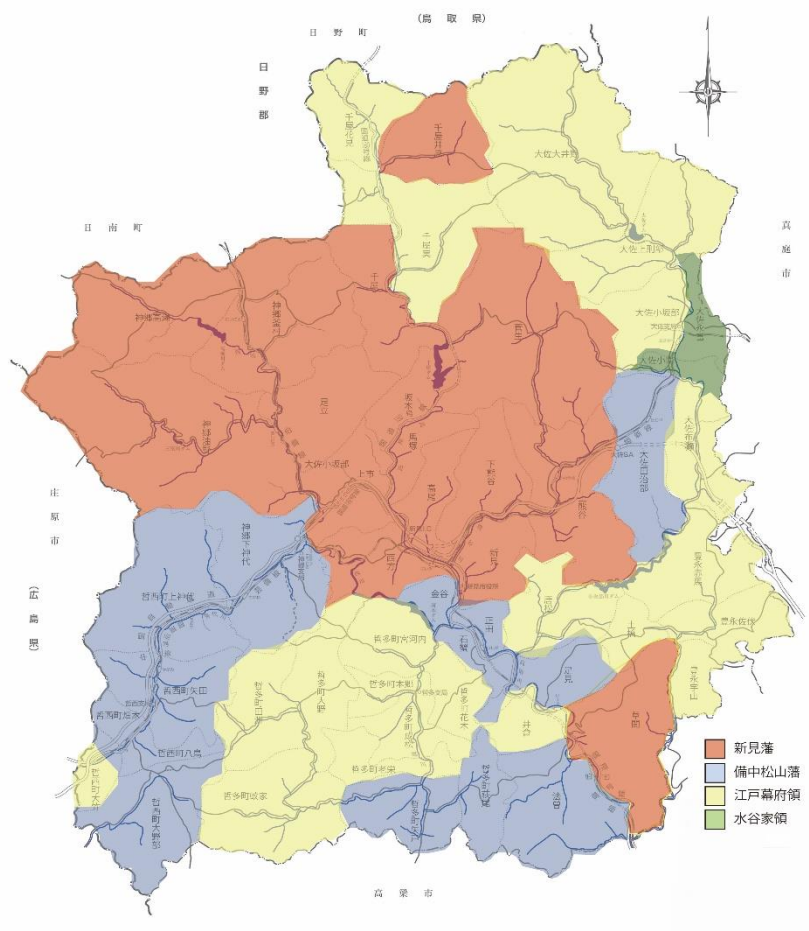


写真 1-22 西来寺

西に菩提寺の西来寺<sup>せいらいじ</sup>を、南東に鎮守の船川八幡宮<sup>ふなかわ</sup>を配置しました。

また御殿（陣屋）以南は、家中屋敷や商人の町で、備中松山藩につながる新見往来や吹屋往来<sup>ふきや</sup>などの街道も整備されました。3代藩主政富<sup>まさとみ</sup>は藩士子弟の育成と庶民の教導を目指して、宝暦5（1755）年に、藩校として思誠館<sup>しせいかん</sup>を創立し、5代藩主長誠<sup>ながのぶ まるかろういん</sup>は丸川松隠を督学に任じました。松隠は思誠館で教育する傍ら、私塾を設立し門下から山田方谷などを出しました。

産業は山間の豊富な資源を使った、たたら製鉄が盛んでした。新見藩直轄の鉄山や、太田家・安藤家・西谷家・木下家などの鉄山師<sup>てつざんし</sup>が経営する鉄山がありました。鉄山の操業に加え農作業にも欠かせなかったのが馬や牛です。太田辰五郎<sup>おおたつごろう</sup>は天保5（1834）年に現在の千屋実に牛市場（千屋市場）を開き、全国から優良な牛を集め改良を重ねました。この牛市場は昭和46（1971）年まで続き、取引される牛は千屋牛と呼ばれました。



#### (4) 近代・現代

##### 【明治時代～第二次世界大戦】

明治2（1869）年、近代的な政治体制を目指した明治政府は、全国の藩に対し、版籍奉還を実施し、それまで藩を治めていた藩主は知藩事となりました。同4（1871）年には、廃藩置県が行われ、新見藩は新見県に、市域のそれ以外の地域は倉敷県に属しました。同年、両県は合併して深津県（同5（1872）年に小田県に改称）となり、同8（1875）年に岡山県と合併しました。同33（1900）年、阿賀郡と哲多郡が合併し、阿哲郡となりました。

近世に御殿（陣屋）町として栄えた新見地区は、明治以降、近代産業の発展に伴って、商店街が形成されました。同8（1875）年の人口は2,863人で、戸数677戸のうち約200戸が商業を営み、現在の「新見御殿町」にあたる本町・中町・下町辺りは大変賑わいました。また、同33（1900）年、阿哲郡役所が設けられると、銀行や企業、警察署などの官公庁が設置されました。

江戸時代末、板倉勝静<sup>いたくらかつきよ</sup>のもとで藩政改革を行った、陽明学者の山田方谷は同3（1870）年、門弟の矢吹久次郎<sup>やぶききゅうじろう</sup>から提供された小阪部陣屋跡で小阪部塾を開き、子弟教育に努めました。また方谷庵【県】（大佐小南）を建て、外祖父母の供養を行いました。同10

（1877）年、同塾で病没し、同42（1909）年、門弟などにより、方谷山田先生遺蹟碑が造立され、大正12（1923）年に方谷園<sup>ほうこくえん</sup>【市】（大佐小阪部）として整備されました。

同2（1913）年に、旧太池呉服店店舗兼主屋<sup>おおいけ</sup>（太池邸）（新見）が建設され、同7（1918）年には、本市初めての百貨店として経営されました。

大正年間に鉄道の整備が始まり、まず昭和3（1928）年に伯備線の全線が開通しました。続いて、翌4（1929）年に、作備西線<sup>さくび</sup>（新見～岩山）が開通し、翌年に作備東

線（津山～勝山）が開通して両線を作備線と改称しました。作備線は、同11（1936）年に姫津線と結ばれたことで、姫新線と改称しました。また、同5（1930）年に神代～矢神間<sup>びんごおちあい</sup>が、同11（1936）年に矢神～東城間、神代～備後落合間が開通し、三神線が整備されまし



写真 1-23 旧太池呉服店店舗兼主屋（太池邸）





写真 1-24 岩山駅舎

た。同年に広島県内の芸備鉄道と庄原線が開通し、翌 12（1937）年にこれらの鉄道が結ばれて、芸備線が開通しました。これにより多くの人の移動や物流が可能となりました。

### 【第二次大戦後～】

昭和 22（1947）年、地方自治法が、同 28（1953）年には町村合併促進法が施行され自治体の合併が推進されました。本市は、同 29（1954）年から翌年にかけて、合併が行われ、現在の本市の基となる 1 市 4 町が誕生しました。同 37（1962）年新見市役所本庁舎（現庁舎）などが完成しました。



写真 1-25 新見市役所 本庁舎

江戸時代末期に発見された満奇洞【県】は、大正年間には稀有な鍾乳洞として知られており、昭和 4（1929）年に歌人の与謝野鉄幹と晶子らが訪れました。同 32（1957）年に県指定天然記念物に指定され、翌年から一般観光地として公開されました。また、同年に井



写真 1-26 井倉洞【県】

倉洞【県】が発見され、満奇洞とともに観光洞として開発・整備が進められ、本市を代表する観光地になりました。同 50（1975）年代以降、観光事業として、草間自然休養村カルスト山荘（草間）や大佐山（大佐小南・大佐小阪部）、すずらの園（哲多町田淵）などの開発、施設整備が進められました。岡山県は、自然の優れた風景地を保護し、施設の整備、県民の保健、休養及び教化に役立てるため県立自然公園を設定し、同 41（1968）年に高梁川上流県立自然公園が、同 52（1977）年に備作山地県立自然公園が指定されました。